ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　田島道場の皆がこれから行くのは、とある人の別荘である。

　例年、夏の合宿は山で行われる。雅也、拓馬、良助の三人が、手持ちのポケモンと共に一週間程山の中に置き去りにされるのだ。最低限の食料は持たせられるが、基本は現地調達で、期間中は山を下りることは出来ない。加えて洞窟の中を探検させられたり、凶暴な野生のポケモンをけしかけられたりする。

　だが、今年は違うのだ。事は一週間前に遡る。

　休み時間、雅也は太一と神楽、加えてその他少数の友達と一緒にお喋りを楽しんでいた時だ。お喋りと言っても、特に何か決まった話がある訳では無く、思いついたことを適当に話題にしたりする。その時、何気なく雅也は夏の合宿の話を出した所、一緒に会話をしていた友達の一人が興味を持ち、自分の別荘でやらないか、という話になったのである。自分の所は、設備も整っているから、と実に熱心だった。

　それに興味を持ったのは雅也も事実だったのだが、まさか『友達の提案』で師匠が動くとは考えづらい。期待しないで、と一言念を押して、取り敢えず雅也はその晩、その話を田島辰巳にしてみた。

　勿論、反対された。というか、ちょっと叱られた。だが――

　その話を持ちかけてきた友達の名前を聞かれ、素直に答えたところ、驚くことに『その提案、乗ろう』と言いだしたのだ。これには雅也は勿論、部屋の外でこっそり聞いていた拓馬と良助も驚いた。残念ながら、何故考えを百八十度変えたのかは分からない。聞いても教えてくれなかったのだ。

　急遽田島辰巳と、その友達の父親との間で話し合いの席が設けられ、無事こうして合宿をその別荘でやることが決まったのである。

　ちなみに別荘を使わせてもらう以上、当然、その話を持ちかけてきた友達も参加する。

　いつもとは違う環境での合宿に、三人は勿論、あまり口には出さないが田島辰巳と、合宿には参加しないはずの奈央も心を躍らせていた。

　だからだろうか。普段は目にしない、近づいてくる白い物体に、田島辰巳を除く四人は釘付けになっていた。

　やってきた小型のクルーザーに乗っていたのは、パッと見、まだ二十代後半くらいの青年である。その横に、彼の面影を残す、雅也と同じくらいの少女……いや少年がいた。どちらも燕尾服をカッチリと身につけており、雅也と田島辰巳以外の三人は目を丸くする。

　雅也はその子を見て片手を上げた。彼は、雅也の友達なのだ。彼のあの格好に驚かないのは、もう見慣れているためである。

「やあ、白。元気だった？」

　そう声をかけると、落ち着いた笑みを浮かべ、『白』と呼ばれた少年がお辞儀をする。

「ええ。雅也こそ、お変わりなさ……いえ、少し雰囲気が変わりましたか？」

「うーん……かも？」

　そこに気が付くとは、流石だなあ。と思いながら、雅也はクスリと笑う。

「雅也、知り合い？」

「紹介してくれよ」

　二人の会話を聞いていた拓馬と良助が、困ったような驚いたような、どっちつかずの表情で雅也と白を交互に見ながら説明を求める。

「ああ、ごめん。二人は会ったこと無かったっけ？　この子は。同じクラスの友達なんだ」

「成瀬白です。どうぞ御見知り置き下さい」

　細いが、よく通る声で白は拓馬と良助にお辞儀をする。

「えっ……と、相川拓馬です。こちらこそ、よろしくお願いします」

「ん……うん。田島良助だ」

　こういう挨拶には、流石の拓馬といえども知識はあるが経験は無い。良助は尚更だ。そのせいか、二人の声は明らかに動揺していた。

　そんな二人が珍しく、つい笑ってしまいそうになった雅也だが、先程の青年がこちらに来るのが見えた。どうやら、田島辰巳と奈央とはもう、挨拶を済ませたらしい。

「優さん、おはようございます」

「これは青柳様。おはようございます。白がいつもお世話になっているようで」

　そう言って笑いかけてくるのは、成瀬。やや茶色がかった清潔な髪が潮風になびいている。やや細めの目は、朝日を受けてかキラリと光っていた。物腰丁寧な口調とは裏腹に、すらっと伸びた姿勢が格好良い。苗字の通り、白の父親である。実は一度、授業参観の時に会ったことがあり、雅也はその時知り合ったのだ。

　取り敢えず雅也は拓馬と良助を優に紹介し――と言っても、既に優は二人の事を知っていたのだが――彼等はクルーザーに乗り込んだ。

　雅也の横で、拓馬と良助はある一点を注視しながら目を瞬かせていた。視線の先には、白だ。

「二人共、どうしたの？」

「……え？　いや、珍しい格好をしているな、と思ってね」

「同じだな。後、一応あの白って子、男……なんだよな？」

　二人の言葉を聞いて、雅也も納得する。確かに最初、雅也も白を見た時同じことを思ったのだ。

　優によく似た容姿だが、細かいところが違うせいか、受ける印象は優とは大分違うのだろう。首のあたりまで伸びた、父親のものとよく似た髪の毛は、少しくせっ毛なせいか、全体的に顔をふんわりとさせていた。目も優はキリッとした感じだが、白はパッチリとした感じで、クリッとしていて可愛らしい。

　要するに、見て呉れは女の子とあまり変わりが無いのである。

「あの子は正真正銘の男の子だよ。彼は……執事なんだ」

　苦笑しながら、雅也はそう言った。